

未来への伝承

筑波山名跡誌



写真1
男体山、女体山の図



写真2
夫女が原の図



写真3
「夫女石」現況

本書は、筑波山に関する名所旧跡の由来を明らかにした地誌書で、幻の名著といわれる貴重な本です。奥書によると、江戸時代の安永9(1780)年に、江戸本石町三丁目東都書林の前川権兵衛が出版したもので、著者は筑波山中禅寺(現在の筑波山神社)の僧侶、上生庵亮盛です。

本書の特徴は、筑波山の山中やその周辺の名所・旧跡が網羅されていることで、佐久良川(桜川)にはじまり、白瀧、大御堂中禅寺、男女川、男体権現、女体権現、大仏石など全部で67か所が紹介され、中にはその風景が描き込まれたものも

あります。安永2年の本書序文の末尾をみると、「万葉已来の歌多き中に、嶺より落る男女川の流を慕ひ、このもかのもとに攀陟れる者、豈唯花の春紅葉の秋のみならん。惜らくは(端)山滋山むかしより、世に伝へて誘く記の無ことを、はじめて登れる人は名所をしらで過行、峯に至り麓に下りて恨ることあり、(中略)遂に筆の短を忘れ、名跡の千が一を誌し、仰ば高き二並の、山の枝折と為すものなりし」とあり、亮盛が筑波山の名所を紹介する案内書のないことを残念に思い、「山の枝折(道しるべ)」として自ら筆を執つたと記しています。

筑波山は、古来より神の住む山として人々の信仰の対象となってきました。男体、女体の二峰には男の神、女の神が鎮座し、山中のいたるところにも神々が宿り、山そのものが神として崇拜されてきました。亮盛は筑波山を「支那の五台山

の巽の嶺裂けて、雲に乗り日本に飛来る。空中にて二片と成り、一片は吉野山に落、一片は筑波山に墜る」、「此峯に詣るものは仙境特通(神通力)の人となり、雲に依て遊ぶかと訝かる」などと記し、中国山西省の霊山五台山になぞらえて、仙人が住む仙山・仙境のイメージをやや誇張し、雲上に聳える高山大嶽の男体・女体の姿を描いて紹介しています(写真1)。

奈良時代の『常陸国風土記』や『万葉集』には、筑波山に坂東諸国の男女が往き集う「嬬歌」の様子がよく描かれています。「筑波町の東に広々たる芝原あり、原のみなみよりに方五六丈の奇石二つあり、其形男女の並びたる如くなれば、夫女石とも、夫婦石とも、陰陽石とも名付、此石に依て夫女が原という。三里登りて絶頂よりも見ゆる」とあり、亮盛は今の筑波山神社の南東あたりのなだらかな山裾一帯が「夫女ヶ原」と呼ばれ、奇石「夫女石」からその名があると紹介しています。「夫女石」と思しき二つの巨石は、現在も筑波山の南麓に横たわっており、亮盛の『筑波山名跡誌』は、その風景とともに筑波山における嬬歌の伝承地を今に伝える貴重な資料と言えます(写真2・3)。

この資料は12月13日(日)まで、市立博物館第31回企画展「古代の筑波山信仰―内海をめぐる祭祀の源流―」に展示しています。ぜひご覧ください。

関市立博物館 ☎824・2928